

親子2代 住民に寄り添う

愛される医師に

ある限り、やめるわけには
いかない」と話す。

地域で安心して暮らす
ために欠かせない医療を
守るために、私たちはど
うしたらよいか。今
年の年間キャンペーン
「いのちを支えて」の第
1部は、十勝の地域医療
の現状をリポートする。
それを通じて、今と明日
の課題を考えたい。

大樹町内の医師大庭嘉人
(よしんご)さん(85)は
2週間に1回、広尾町紋別
の小田ノブさん(92)宅を
往診する。12月初旬、膝の
悪いノブさんにいつものよ
うに痛み止めの注射を打っ
た。診察の際、ノブさんは
顔を曇らせた。
「先生、足の指が痛い」
「これはニッパーで爪を
切らないといけないね」

過疎地のかかりつけ医

大庭さんは左足の親指の
爪が厚くなりすぎているこ
とに気が付き、翌日切るこ
とにした。ノブさんは安心し
た表情を見せた。

気軽にご相談

幕別町忠類の女性(95)
宅もほぼ毎週訪問し、脚を
診察する。2人とも自力で
の通院は難しい。大庭さん
は「患者が通えなければ、
往診するのが医者役目」
と言い切る。ノブさんの家
族は「緊急の時はいつでも
連絡をほしいと言われている。
先生には何でも気軽に
相談できる」と感謝する。

大庭さんは1964年に
大樹町内で医業を開設して
以来、往診を続けている。
「雪が降ると、往診先の農
家が用意した馬そりを使っ
て山奥まで行ったものだ。
湯たんぽもたくさん持っ
た」。そう振り返る大庭さ



往診する大庭嘉人医師。患者の相談にも気軽に応じる(幕別町忠類で、金野和彦撮影)

んの患者の要望にできる限
り応えようという姿勢は、
昔も今も変わらない。
患者は昼夜を問わず診察
を受けに訪れた。24時間3
65日態勢で働き続けた。
「海外旅行に行こうとパス
ポートを取り、英会話も勉
強したが、結局一度も行け
なかった」と笑う。
札幌医大出身で道内各地

の病院で勤務していた長男
の滋理(しげり)さん(55)
が、2001年に大樹に帰
ってきた。外科の専門的手
術も、地方での総合診療も
経験した。滋理さんは「専
門的なもの総合的なもの両
方好きです。地元に戻って
きたのは家業を継ぐという
思いがあったから」と語る。
嘉人さんは07年に直腸が

んを発症した。回復したが、
今は滋理さんが大半の患者
に対応している。
国は慢性期の患者に対応
する療養病床の削減を進め
るが、大庭医院は17床(他
に一般病床2床)を維持し
ている。親子2代にわたり、
地域の「かかりつけ医」と
して患者を第一に考えてい
るからだ。

療養病床 高齢者など長期療養が必要な慢
性疾患患者のための入院用ベッド。医療保険
が適用される医療型と介護保険が適用される
介護型がある。国は療養病床削減と在宅への
転換を推進。十勝保健福祉事務所によると、
管内の診療所数は横ばいだが、有床診療所は
00年の52カ所が10年は35カ所にまで減った。

看護師5人ほどで、満床
が続く病棟をやりくりす
る。滋理さんは「療養病床
は診療報酬が低く、看護師
の負担も大きい。外来だけ
の方がもうけは出るかも」
としながら、「自宅や施設
入所が難しい人もいる。先
生、助かるわ」という声

「地域一体となって病院
と診療所の連携を实践すべ
きた。かかりつけ医は普段
から患者の相談に乗り、い
ざというときに適切な病院
を紹介することで、患者は
結果的に診察時間や医療費
負担を抑えられる。それと
看護師不足が問題だ。札幌
でも苦勞しているの聞く
が、大樹はさらに深刻。安
定した地域医療のために養
成や偏在の解消が必要だ」
(佐藤圭史)

09年度から毎週水曜日に
大樹町立国保病院に協力す
る形で、夜間の急患を受け
入れている。また昼休み中
や勤務後のサラーマンも
来院できるように、週2回
診療時間を延長した。「地
域に愛される医師を目指し
てほしい」。嘉人さんの思
いを感じつつ診察を続ける
滋理さんは、地域医療の課
題をこう考えている。